

# 針を置いたらあの海へ



文庫 316頁 上代900円

ニット好きのやさぐれ美少年・レオと  
心優しいタトゥー彫り師・たっちゃんの  
ニット&タトゥー創作ボディ青春小説。

2026.1月現在、累計130部販売。

「ねえこれもレオ似合いそうだよ」

勝手に呼び捨てにすんな、と思いながらたっちゃんさんを振り返ると、その手には、多色編みで、雪の結晶やイカリをイメージした細かい模様が、ランダムなストライプのように積み重なった、見事なフェアアイルニットベストがあった。

受け取ると、フェアアイルの持ち味の、何度触つても驚嘆する見た目以上の軽さと緻密な編み目。模様の全貌は分からないけれど、これが間違いない品だということは分かる。タグを見ると、フェアアイルの老舗ブランド JAMISON'S。まあ、そうだろうなとは思った。ますます欲しくなった。

「ねえ、たっちゃんさん、これ」

「はいはい」

「ここ、何色？」

ベストの襟ぐり辺り、全体のベースとなる部分を指さしてそう聞いた。

「え、何色っていうんだろ、スミクロかな？　ちよつと褪せた黒みたいな」

「じゃあ、ここは？」

「これは、ちよつと暗めの赤というか、ワインレッドみたいな」

少しの沈黙の後、たっちゃんさんが言った。

「レオ、色、苦手？」

「うん、黄色系と青系は分かるけど、他はあんまり区別付かない。だいたい、多分みんなが言うところの茶色かグレー」

「生まれてから、ずっと？」

「うん、生まれつき」

だから俺には、技術はあつたとしても、多色使いが最大の魅力のフェアアイルは編めない。一段一段はシンプルに二色を組み合わせるだけなのに、段ごとに色遣いを変え、気づけば複雑な模様を編み出す。その制作工程は、想像するだけで爽快だ。でも。

「レオ。ここ、上の方は青なの分かる？ その中に、赤系の茶色でこの線が描かれてる。その下の段、地のスミクロっぽく見えるんだけど、すっごい暗い赤を使つてて、それがその下の赤色ベースの模様との橋渡しになってて、洒落てるんだよ」

急に、たっちゃんさんが流ちょうに解説し始めた。しかも、単に色名言われるだけよりずっと分かりやすく。

「全体は、赤系の模様と青系の模様の繰り返しなんだけど、赤と青の中間の紫がこことか、こことかに入つてて、対照的な色だけどうまく馴染んでる。ちなみに、こっちのベースは、ベースが薄めのグレーで、茶色とか、抹茶ぽい緑の模様。アースカラーって言

うのかな。俺はこのスミクロの方が締まってて、レオに似合うと思うよ」

懇切丁寧に解説してくれているのを聴きながら、たっちゃんさんはこんな長い文章喋れるのか、と失礼極まりないことを考えていた。

「じゃあ、こっちにしようかな」

「試着、いいの？ ていうか俺が見たいよ、着てる所」

「ご試着どうぞ、試着室こちらです」

インナーのTシャツの上から重ね着してみる。

「いいじゃんいいじゃん。普通のシャツでもいけそう」

「……これに、フラップ付きのキャップとか合わせようかな。俺、こういうトラディショナルなやつ着る時、ハズさないと『よそ行き坊ちゃん』になるから」

「はは、自己分析的確！ レオ面白いねえ」

ちよつと笑った後、たっちゃんさんが言った。

「このベスト、俺買ってあげようか」

「えっ、いいですよそんな、理由ないし」

「いいのいいの、連れてきたのも見つけたのも俺だよ？ 買わせてよ。そしてもっと俺に優しく接して？」

俺を金払わないと笑わない奴みたいと言わないで。

「いやでも、ホントに、ばあちゃんに小遣いも貰ってるし」

「それはとつときなよ。ちよつとお兄さんぽいことさせてよー、俺兄弟いないしそう言うのやってみたいのよ」

これ以上いやでも……を繰り返すと、何か変な感じになりそうだから、潔くお言葉に甘えることにした。アランカーデイガンは自分で買った。

青少年の健全な育成に対して意識が高いたっちゃちゃんさんの

「さつさと食べてさつさと帰って、おばあちゃんを安心させましょう」

という提言に従い、十七時半だけど近くのカレー屋で晩御飯を食べることにした。

「ベスト、ありがとうございます」

「急にかしこまるね。全然、いいよお」

「あと、デザインの説明も。すげえ分かりやすかった」

お役に立ててよかったです、と言ってたっちゃちゃんさんはお冷をがぶ飲みした。

「ここ俺、出します」

「え、やめて。俺いくつだと思ってんの？ ティーンにおごってもらおうほど非常識じゃないよ」

本当にいくつなのか教えてほしい。見た目は年齢不詳、中身は無邪気で、捉えどころがない。

「いくつですか」

「当ててみてえ」

ニッコリ笑って返された。俺は、質問に質問で返されるのが大嫌いだ。一回目だからギリ許す。

「二十五ぐらいですか」

「惜しい」

いくつに見える？ の会話に2ラリー以上かけんなよ。二度目はない、と思って黙り込んだ。

「……えっさみしい、聞いてよ。二十八だよ、レオのひとまわり上だよね、たぶん」  
「そうですね」

お冷をひと口飲んでテーブルに置いた。

「……あつ、やばいこれ俺が喋れないと仲良くなれないやつだ。俺、達人の達<sup>だ</sup>に海で達海。苗字は佐藤。超ふつう。レオは？」

「市原レオです。市原悦子の市原に、レオはカタカナ」

「市原悦子さんレオの世代でも分かるんだあ、大女優ー」

沈黙。俺は慣れてるけど、たっちゃんさんたぶんこういうの苦手だろうなと思いつつ、沈黙。でも、意外とたっちゃんさんは平気そうで、テーブルの隅にある、球体の占いマシーンをいじったりしていた。

「ねえ、さっきのベストさ、あれどういうやつなの。俺のこのセーターみたいに、解説してよ」

「あー……あれは、フェアアイルって言って、スコットランドのシェットランド諸島の、小さい島で編まれてるニットですね。ああいう、カラフルな細かい模様が特徴なんですけど、それ以外にも、使っている毛糸がちよつと変わってて。シェットランドの羊の毛つて、柔らかくてしつかり絡みやすいから、ああやって何色も使って細かい編み目で編んで、最後に洗いをかけると、フェルトみたいになつて模様が馴染むんです」

「確かに、編み目一体化してたかも。ちよつと見せて」

袋からさつき買った、いや買ってもらったベストを取り出す。

「ほんとだあ、フェルトみたいだわ」

「古着だから尚更、フェルト化進んでますね。あと、もう一つ大きい特徴があつて」  
V字の襟元と袖ぐりを指さす。

「ここ、最初は閉じて編むんです。大きな袋みたい」

「えっ、じゃあどうやって穴開けるの？」

「切ります」

「えっ」

「一度編んだものを、ハサミで切るんです。もちろん、そのために『ステイク』っていう切りしろ部分がありますけど」

「切って、解けたりしないの?!」

「編地がよく絡んでるから、切っても解けないんです。袋みたいに繋げて編むから、脇にとじはぎ……えっと、縫い目みたいなのがなくて、保温性も高いし」

「っはー！ よくできてるねえ」

本当に、よくできていると思う。その地の気候や羊の毛質がうまく生かされている。こんなに目の細かい、柄も細かいニットを編み上げた後、大胆にハサミを入れるなんて発想をした人は、余程肝が据わっていたんだろう。

「レオはこれ、編んだことあるの？」

「俺は……編めない」

黙り込もうかと思っただけど、さすがに失礼だから、ちゃんと答える。

「普通の人でも、これだけの色数使うと、こんがらがると思いますが。俺なら、なおさら」  
そこまで話したところで、料理が運ばれてきた。カレーが付いたりしないように、さつとベストを片付ける。たちちゃんさんは「おいしーね、めっちゃお腹すいてたからほんとおいしー」と言いながら、俺は無言で食べる。

半分くらい食べたころ、たちちゃんさんがメニューを見ながら、ラツシー飲む？ と聞くのにつけてこう聞いてきた。

「レオ、さっきの編みたいでしょ。なんだっけ、名前忘れた」

「フェアアイル」

「そう、それ。編みたいでしょ」

「や、だから」

「一緒に編もうか」

「え？」

「手は貸せないよ、目だけ。毛糸選ぶとか、次この色だよとか、ここまで間違えずに編めてるよとか。何が必要かは、俺編み物したことないし分かんないからさ、そこはレオが指示してよ」

うそ。考えたこともなかった。

誰かと一緒に編む？ 目を借りる？ にしたって、編み目の段数は三桁に達するだろうし、そのいちいちに「この色だよ」なんて教えてもらうのは現実的じゃない。でも少なくとも、色選びに関しては、とても信頼のおける人だということは分かっている。

「編みたい。編みたいけど、どういう方法にすればいいかが」

「まあ、そこはゆっくり考えようよ。声かけてくれたら俺はいつでも乗るよ、なんかすごく楽しそうだし」

全く、おかしな人だ。愛想悪い俺のために、こんな見るからに面倒くさそうなことを、楽しんでやろうとしている。この親切でおかしな人のことを俺はよく知らない、と気づいた。

「あの、たっちゃんさんは、何してる人なんですか」

「あ、俺の店見てなかったか。うちタトウースタジオなの。彫師さんだよ。刺青彫る人」

編み針と違ってずいぶんと鋭利だけど、俺と同じく、針を持つ男だった。